2020 年 11 月 28 日(土)13:30～14:00
日本催眠医学心理学会第 66 回大会　演題発表 5　会場:オンライン開催

# 年齢退行を用いて潜在化された記憶と言語を想起する試み

〇長谷川明弘(東洋英和女学院大学人間科学部)
武居将志(所属無し)・大工原将貴(福井記念病院)
キーワード:年齢退行、潜在記憶、潜在化言語

**【目　的】** 記憶と言語は心理学で長く取り上げられてきたテーマである。今回は、催眠法による年齢退行によって過去に獲得していた言語ならびに記憶の想起がどの程度できるか検討した。

**【方法】** ＜実験参加者＞A(10 歳代後半)高校生　/　＜家族歴＞父(40 歳代後半), 母(40 歳代後半), 弟(10 歳代半ば)　/　＜生育歴＞X 年 10 月、A は日本人の両親の元、東南アジアにある B 国で出生した。乳幼児期の A は、日中は主に C 国出身の家政婦の話す言語と B 国の公用語となっている英語と中国語をテレビ視聴し、そして両親が帰宅するとその母語である日本語に接していたという。A が最初に話した単語は B 国の「水」という意味の言葉であった。その後に家族が X+2 年 8 月に公用語が中国語となる C へ引っ越した。C においては、A の弟を出産した母親と生活して日中は日本語とテレビから流れる中国語に触れて成長した。A が 3 歳になり、C にある現地の幼稚園へ通い始めた。通園から 3 ヶ月経過した頃に C の公用語となる中国語を話し始め、現地の子どもと同水準で話していたという。X+5 年 8 月に家族が日本へ帰国し、A が半年ほどで中国語を話さなくなった。また C の頃の記憶も薄れたという。
＜実験日時＞第1回目が Y 年 8 月、第2回目が Y 年 10 月でともに所要時間は 90 分ほど。
＜催眠実施責任者＞認定催眠士を有する心理学者　＜実験手順＞スタンフォード催眠感受性尺度にて測定し、休憩を挟んで催眠法による年齢退行を行った。

表 1: スタンフォード催眠感受性尺度の結果

| | | 1回目 | 2回目 |
|---|---|---|---|
| 催眠感受性尺度の得点項目 | 1.体位動揺 | 1 | 1 |
| | 2.閉眼 | 1 | 1 |
| | 3.手の下降 | 1 | 1 |
| | 4.腕の運動不能 | 0 | 0 |
| | 5.指の組付き | 0 | 0 |
| | 6.腕の硬直 | 0 | 0 |
| | 7.両手の運動 | 1 | 1 |
| | 8.言語抑制 | 0 | 1 |
| | 9.幻覚 | 0 | 0 |
| | 10.眼瞼硬直 | 0 | 0 |
| | 11.後催眠 | 1 | 1 |
| | 12.健忘テスト | 1 | 0 |
| 合計得点 | | 6 | 6 |
| 催眠感受性の高さ | | 中 | 中 |

**【結果】** スタンフォード催眠感受性尺度の得点は2回ともに 6 点(中程度)となった(表 1)。第 1 回目報告:当時通っていたであろう幼稚園の風景が見えた。1 人称で自分がそこにいるような感覚を感じた。想起された場面はパステル画のような色彩であった。他に、従兄らしい男の子と屋台のようなところボールをコップに入れている場面が見えた。これらは初めて思い出した記憶であり、驚いたが、声や周囲の音等、音声は全く聞こえなかった。また中国語を思い出すことはなかった。第 2 回目報告:記憶の引き出しは3つが横に並んでいるようなイメージができた。次に C の引き出しを思い浮かべ、中に何が入っているか、イメージするように言われた。最初にオレンジ色の夕日が見えたが時代は不明であった。しばらくすると赤い屋根の駅らしき建物が見えた。次に建物の近くで自動車が見えた。実験後に母親から記憶想起内容の妥当性を確認し、また A は C に住んでいたという実感が持てるようになったという。

**【考　察】**実験 1 回目では視覚面の記憶だけが想起され、実験 2 回目では視覚並びに音声の刺激を手がかりとして記憶想起がどの程度生じるのか確認したものの、1 回目同様に視覚面の記憶想起だけとなった。これらから A が視覚優位であるためと考えられた。言語については、想起だけでなく音声刺激の意味をほとんど思い出せなかった。Fromm(1970)が年齢退行によって幼少期の 4 歳まで用いていて現在使っていない言語を対象者が話したという研究報告した中では、その催眠感受性が 12 点と満点と高得点になっていた。今回は 6 点と中等度であり催眠感受性の高低が影響している可能性が伺えた。言語は、視覚と聴覚との連合で獲得されると考えられ、これらから総合的に言語の想起が行われなかったと考えた。今回のような研究が調べたかぎりあまり確認できず今後の追試が期待される。

# 年齢退行を用いて潜在化された記憶と言語を想起する試み

○長谷川明弘
（東洋英和女学院大学人間科学部）
武居将志（所属無し）
大工原将貴（福井記念病院）

日時：2020年11月28日（土）13:30～14:00
会場：オンライン開催
日本催眠医学心理学会第66回大会　演題発表　5

## 【目　的】

- 記憶は心理学で長く取り上げられてきたテーマである。今回は、催眠法による年齢退行によって過去に獲得していた言語をどの程度想起できるか検討する。
- キーワード:年齢退行、潜在記憶、潜在化言語



## 【方法】　1/7

- ＜実験参加者＞
  - A(10歳代後半)高校生
- ＜家族歴＞
  - 父(40歳代後半)，母(40歳代後半)，弟(10歳代半ば)



## 【方法】　2/7

- ＜生育歴＞
  - X年10月、Aは日本人の両親の元、東南アジアにあるB国で出生した。B国の産休・育休は3か月しか取得できないためX+1年2月より、母は職場復帰した。
  - Aは、8時から18時まで、現地で雇用された隣国となるC国出身の家政婦に世話をしてもらった。乳幼児期のAは、日中は主にC国の言語とB国の公用語となっている英語と中国語をテレビ視聴し、そして両親が帰宅するとその母語である日本語に接していたという。

## 【方法】 3/7

- ＜生育歴＞
  - Aが最初に話した単語はB国の「水」という意味の言葉であった。その後に家族がX+2年8月に公用語が中国語となるCへ引っ越した。Cにおいては、Aの弟を出産した母親と生活して日中は日本語とテレビから流れる中国語に触れて成長した。Aが3歳になり、Cにある現地の幼稚園へ通い始めた。通園から3ヶ月経過した頃にCの公用語となる中国語を話し始め、現地の子どもと同水準で話していたという。



## 【方法】 4/7

- ＜生育歴＞
  - X+5年8月に家族が日本へ帰国し、Aが半年ほどで中国語を話さなくなった。またC国の記憶も薄れたという。
  - Aは、X+16年Cへ旅行に出掛けた。Aは旅行に先立って中国語を学習したが住んでいた当時の言葉や記憶を思い出すことはなかったという。



## 【方法】 5/7

- ＜実験日時＞
  - 第1回目がY年8月
  - 第2回目がY年10月
    - 所要時間は90分ほど。
- ＜催眠実施責任者＞
  - 認定催眠士を有する心理学者が催眠誘導を担当した。



## 【方法】 6/7

- ＜実験手順＞
  - スタンフォード催眠感受性尺度にて催眠感受性を測定し、休憩を挟んで催眠法による年齢退行を行った。
  - 第1回目:催眠誘導後にアナログ時計の針を反対に回して時間を遡っていき、針が止まると思い出した場面を話してもらった。時代を照合しながらCに住んでいた時代まで遡った。

# 【方法】 7/7

- ＜実験手順＞
  - 第2回目:上記に加えて、また居住していた「B」「C」「日本」の記憶の引き出しを頭の中で思い浮かべてもらった。
  - その後、中国語による音声刺激を2回提示し、さらに視覚刺激として中国語の絵本を提示した。
    - 事前に母親だけに依頼をして中国語で「おはよう」「着替えましょう」「名前は何て言うの？」「（Aのイングリッシュネームで呼びかけた後）一緒に遊ぼう」「お昼ごはんの時間ですよ」「また明日」を録音した音声刺激ならびにAが幼稚園で使用していた中国語の絵本2冊を視覚刺激として用意してもらった



# 【結果】

- スタンフォード催眠感受性尺度の得点は2回ともに6点(中程度)となった。

表1: スタンフォード催眠感受性尺度の結果

| | | 1回目 | 2回目 |
|---|---|---|---|
| 催眠感受性尺度の得点項目 | 1.体位動揺 | 1 | 1 |
| | 2.閉眼 | 1 | 1 |
| | 3.手の下降 | 1 | 1 |
| | 4.腕の運動不能 | 0 | 0 |
| | 5.指の組付き | 0 | 0 |
| | 6.腕の硬直 | 0 | 0 |
| | 7.両手の運動 | 1 | 1 |
| | 8.言語抑制 | 0 | 1 |
| | 9.幻覚 | 0 | 0 |
| | 10.眼瞼硬直 | 0 | 0 |
| | 11.後催眠 | 1 | 1 |
| | 12.健忘テスト | 1 | 0 |
| 合計得点 | | 6 | 6 |
| 催眠感受性の高さ | | 中 | 中 |



# 【結果】第1回目報告

- 当時通っていたであろう幼稚園の風景が見えた。1人称で自分がそこにいるような感覚を感じた。想起された場面はパステル画のような色彩であった。
- 他に想起した場面では、従兄らしい男の子と屋台のようなところボールをコップに入れている場面が見えた。
- これらは初めて思い出した記憶であり、驚いたが、声や周囲の音等、音声は全く聞こえなかった。また中国語を思い出すことはなかった。
- 解催後に、母親からAが4歳のころに親類一家が日本から遊びに来て、滞在中、近所の川沿いにあるゲーム屋で遊んだことがあったと教えてもらった。



# 【結果】第2回目報告

- 記憶の引き出しは3つが横に並んでいるようなイメージができた。次にCの引き出しを思い浮かべ、中に何が入っているか、イメージするように言われた。
- 最初にオレンジ色の夕日が見えたが時代は不明であった。しばらくすると赤い屋根の駅らしき建物が見えた。
  - 次に建物の近くで自動車が見えた。自動車の窓の高さの位置が自分の目の高さあたりにあるので、身長は幼稚園程度であろうと推測した。
- 解催後に、母親から、当時住んでいた地域には大きな川沿いに広い公園があり、そこから見える夕日は鮮明で明るく、「その国の中で一美しい夕日」といわれていたのでその光景を強烈に覚えていた可能性があり、赤い屋根は居住していた地域の「駅」の屋根の色と一致すると教えてもらった。

## 【結果】自己認識について

- 実験後に「自分自身をどのようにと捉えるようになったか」
  - Aは実際は空っぽだった記憶に、催眠後はCに住んでいた頃の記憶をいろいろと想起するようになったことからCに住んでいたという実感が持てるようになったという。



## 【考　察】

- 実験1回目では視覚面の記憶だけが想起
- 実験2回目では視覚並びに音声の刺激を手がかりとして記憶想起がどの程度生じるのか確認した
- 視覚面の記憶想起だけとなった。
- Aが視覚優位であるためと考えられた。



## 【考　察】

- 言語については、想起だけでなく音声刺激の意味をほとんど思い出せなかった。
- Fromm(1970)が年齢退行によって幼少期の4歳まで用いていて現在使っていない言語を対象者が話したという研究報告した中では、その催眠感受性が12点と満点と高得点になっていた。今回は6点と中等度であり催眠感受性の高低が影響している可能性が伺えた。



## 【考　察】

- 言語は、視覚と聴覚との連合で獲得されると考えられ、これらから総合的に言語の想起が行われなかったと考えた。
- 今回のような研究が調べたかぎりあまり確認できず今後の追試が期待される。

ご静聴
ありがとうございました。

# 【文　察】


- Fromm E (1970) Age Regression With Unexpected Reappearance of A Repressed Childhood Language,The International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis Vol.18,No.2,pp.79-88.
- 今井久登(2014)潜在記憶研究における想起意識の位置づけとその変遷,学習院大学文学部研究年報 2014,60巻,pp177-189